



# Vision

## 0.3%からの脱却

香川大学医学部細胞情報生理学教授

徳田雅明

医学部の生理学に勤めてはや20年が経ちました。香川大学医学部では、入学生の大多数が臨床医を目指しています。1学年約100名の学生が居ても基礎研究を志すのはせいぜい5人くらいです。さらにその中で我が教室の大学院生になろうという奇様な学生は、3年(300人)に1人(=約0.3%)いればいい方なのです。ふと思い立って、生理学会事務局に現在の会員数などを教えてもらいました。平成17年2月10日現在で3048人とのことです。科学技術白書によると研究関係従業者数は96万8100人(平成15年3月)ですから、生理学会会員は研究者全体のほぼ0.3%を占めていることとなります。それは我々の教室に入ってくる大学院生の率とほぼ同じでした。もちろん単なる偶然なのですが、これくらいが「生理学への関心率」と言い過ぎでしょうか。

常任幹事会に参加させていただくようになり、金子章道会長はじめ全員で何とか学会の活性化を目指そうと大変な努力と施策を展開していることを痛感しました。そんな中、昨年11月に香川大学で中国四国地方会を開催しました。皆さんに学部学生の参加を促していただき、また医学部以外の研究機関からの参加を呼びかけました。そして今回学部学生がかなり参加してくれました。「小さい学会なのに幅が広すぎて付いていけない」「何だか活気がない」などという厳しい印象もありましたが、「思っていた以上に気さくな雰囲気でも議論ができる」「意外に格式張ってなくて居

地がよかった」「励ましてもらって嬉しかった」などの好印象もあり、この視点での地方会の位置づけを明確化し、学部学生や大学院生を生理学でプライミングする必要を感じました。

さて、香川医科大学と香川大学が平成15年10月に統合して以来、他学部の人たちと付き合う機会が増えてきました。私の関わっているプロジェクトにおいて、農学部や工学部の人たちとの共同研究も始まりました。彼らに、生理学会の話をする、結構興味を示してくれます。ただし「生理学」というとやはり医学部的な印象が強く、自分たちが入会しても居場所がないのではという先入観があります。薬学部や歯学部の出身の人たちに聞いても、医学部の生理学とは違うと言います。そもそも“physiological importance”という言葉などが論文などでは多用されていますが、どうやら学部や専門が違くと“physiological”の意味が違っていきやすいようです。医学部出身者には「人体機能」に照らして考えるのが当然のことと染み付いていますが、他学部の人たちには、「細胞や分子環境レベルでの妥当性」という感覚であったりします。人体あるいは病気に話を持って行かれると、医学部以外の人たちには戸惑いの領域です。我々はどこかで「人に役立ってこそ本当の価値」と奢っているのかもしれませんが、医学部以外に裾野を広げて行こうとする時に、心すべき点だと感じています。

うちの若手の先生は「分子生物学会くらい会費

が安いと、割合気軽に入会できる」と言っていました。実はそれが会員数を増やす決め手なのかもしれません。「年会費分に見合うものが得られるのはどの学会か」ということは、大学院生などの若手はなかなかシビアに見ています。勧誘する側にとってもこれは大変重要な材料です。今後の新しい学会運営・経営で、そのような方向が進めばいいと願います。

そうそう先程の生理学会事務局からの情報では、3048人の会員の内訳は、大学2434、専門学校22、研究所261、企業71、病院157、その他103、ということでした。専門学校や特に企業からの会員が少ないですね。今後そのあたりへの働きかけが鍵のように思います。時代の流れもあり、大学の方針でもあって、私も産学官連携プロジェクトに参画していて、複数の企業の研究者の人たちとも共同研究をするようになりました。彼らには、生理学会に入りませんかと声を掛けています。彼らにとっては、伝統のある生理学会の敷居は（本当は高くないのに）まだまだ高く見えているようなのです。そういう人たちにはまさに「地方会引っ張り込み作戦」で、先程の学部学生のように、生理学会を体験してもらうのが有効に感じます。今回の地方会にも地元企業の研究者が参加さ

れ、今度の大会には演題を出してもらえることになりました。

最後に我が生理学教室の0.3%からの脱却作戦について。我々の医学部では、2年次生後期で生理学（講義全体の4分の3程度）があり、3年次後期～4年次にかけて医学コアカリキュラムに準拠した8系統からなる統合講義の中で講義（4分の1）を持っています。統合講義においては生理学や解剖学が臨床につなぐ前座的な位置づけになりつつあるという問題もあります。しかし反面いい点もあります。2年次だけでなく、3年次、4年次でも学生に接することができます。これを利用しない手はありません。3年次、4年次には、難解でも我々の研究内容を紹介し、我々の生理学的アプローチ法を提示しています。学生も医学の知識を次第に習得する中で、生理学に触れ、考える機会になっているようです。自分が如何に20年間「生理学と格闘してきたか」を伝えることが、一番生理学を理解してもらえることのように思っています。それに共感（いい意味の反感も含め）を覚え、生理学のフィールドで研究を進めたいという学生を、少なくとも2年に1人確保（0.5%）できればと頑張っています。